

金融庁参事官 神田 眞人

作家 半藤 一利 先生

(元文藝春秋専務取締役)

半藤 一利 Hando Kazutoshi

作家。「歴史探偵」を自称。昭和5年、東京生まれ。東京大学文学部卒業後、文藝春秋入社。「週刊文春」編集長、「文藝春秋」編集長、出版局長、専務取締役等を歴任して退社し、作家に。『漱石先生ぞな、もし』で新田次郎文学賞、『ノモンハンの夏』で山本七平賞、『昭和史』で毎日出版文化賞特別賞、昨年は菊池寛賞を受賞。『日本のいちばん長い日』、『聖断』、『レイテ沖海戦』、『遠い島ガダルカナル』、『清張さんと司馬さん』、『幕末史』、『あの戦争と日本人』、『日露戦争史』、『日本型リーダーはなぜ失敗するのか』等、著書多数。

神田 眞人 Kanda Masato

金融庁参事官。東京大学法学部卒業、オックスフォード大学経済学修士(M.Phil)。世界銀行審議役、財務省主計局主査(運輸、郵政等予算担当を歴任)、国際局為替市場課補佐、大臣官房秘書課企画官、世界銀行理事代理、主計局給与共済課長、主計官(文部科学、経済産業、環境、司法・警察、財務予算担当を歴任)、国際局総務課長等を経て現職。元オックスフォード日本協会会長、浩志会代表幹事など。



右：半藤一利 作家

▶神田参事官(以下、神田) 本日は大変、ご多忙にもかかわらず貴重なお時間を頂き、誠に有難うございます。

世界が流動化している乱世であるからこそ、古今東西の歴史の教訓を一層、謙虚に学ぶべきです。この度、原田眞人監督により再び映画化された『日本のいちばん長い日』を鑑賞した機会に、先生の原作や『聖断』を再読すると共に、『昭和天皇実録』が昭和天皇もご覧になられたことを確認した岡本喜八監督版も久方ぶりに観られた読者も多いかと思えます。私もその一人です。私は、戦争抑止のための安保法制必要論者でもあり、先生と政策を異にすることも少なくありませんが、だからこそ、先生の業績から学ぶべきと考えております。是非、読者に先生の幅広いご見識を共有させて頂ければ幸いです。

(歴史との向き合い方)

▶神田 先生の著作を何十冊と読んでまいりました。

たが、最近の『昭和天皇実録の謎を解く』は特に興味深いものでした。無数の史料を整理する際の編者の意図を慎重に推測しながら、読み解いておられます。『実録』はあらゆる史料を総覧した決定版として、その編纂の労苦に心より敬意を表しますが、『富田メモ』や『昭和天皇独白録』等の証拠採用の悩みも示唆されています。固より、御厨貴『近現代日本を史料で読む』からも史料の評価に関心を持っていましたが、『日本のいちばん長い夏』の中で、鈴木貫太郎の『木戸日記』への疑念を紹介され、『賊軍の昭和史』で、歴史はいくらでも偽造できる、と達観され、また、先生の若年期に伊藤正徳記者から嘘の証言を見破る必要を学んだとも話されています。まず、先生は歴史探求の過程で諸史料をどう評価されるのでしょうか。

▶半藤先生(以下、半藤) 千葉県野田に鈴木貫太郎記念館があり、そこに展示してある資料の

中に貫太郎さんが読んでおられた『木戸日記』がありました。記念館の人もそれを余り重要なものと思っていないようでしたが、見てみると貫太郎さんがいろんな注釈を欄外に入れていました。それをずっと見ていきましたら、木戸さんが「天皇に聖断を請うたのは私だ」と書いている部分に、貫太郎さんが「これは違っている。天皇に無理にお願いをしたのは私だ」という意味のことを書き込んでるのが目に入りました。これは貫太郎さんが勝手に書いている可能性もあり、真実かどうか判らなかったのですが、『昭和天皇陛下実録』の方で、「8月14日に貫太郎さんが特別な拝謁を申し出て、木戸さんと貫太郎さんがそろって侍立して、貫太郎さんが特別なことを言い出した。そして私はそれを承諾した」といった趣意の記載がありました。聖断は両方の共作という面もありますが、天皇にお願いしたのは明らかに貫太郎だとこれで確定しました。ですから木戸さんが日記に書いているのと、貫太郎さんの注の両方を照らし合わせ、『実録』も読み合わせると、なるほど、こういう形で最後の御前会議がひらかれ、聖断が行われたのだということが良く判るようになったのです。こういう具合に、歴史資料というのは、当時の日記でさえ当事者が自分の都合の良いように書くという場面に沢山ぶつかってきました。

▶**神田** 確かに史料の真偽の判断は困難であり、どういう風に目利きをされるのでしょうか。

▶**半藤** 私は大学を出て文藝春秋に入りましたが、その時は歴史を生涯の仕事にしようとはこれっぽっちも思っていませんでした。それが坂口安吾さんのところに行きまして、そこで原稿が出来上がるまで一週間、歴史というのはものすごく面白いんだよ、という安吾さんの話を毎晩聞かされました。例えば、「君が習った大化の改新というのは、蘇我というのが無茶苦茶に悪者で、天皇というものが既にあったと日本書紀には書かれているが、そうではないと思うよ。歴史の見方というのは古事記、日本書紀の二つが最高の史料だと思

ったら大間違いで他の史料もあるんだよ」と言っていて、『上宮聖徳法王帝説』を見せてくれました。「所々が四角になっていて、それは虫食いができたということになっているが、この二文字のところに蘇我と入れるとぴたっと合う。日本の中ではまだ天皇制はしっかりと確立していなくて、豪族の偉いやつが支配をしていた。だから大化の改新というのは蘇我天皇の支配を革命によって覆し、それを別の天皇家の方に持ってきたと見ればクーデターなんだ」というようなことを安吾さんは毎晩、語っていました。

この説が正しいかはともかく、歴史というのは見方を変えると裏の裏があって、僕らが学校で習ってきた歴史とはずいぶん違うと思ったのが始まりなのです。文春に入ってから、『連合艦隊の最後』や『大海軍を想う』という昭和30年頃のベストセラーを書いていた伊藤正徳という戦前の軍事記者の本を作る担当になりまして、伊藤さんの代わりに、当時まだ沢山存命だった將軍や提督や参謀たちの話を聞いてきてくれないかということで取材に行くことになりました。ところが、報告書を伊藤さんに提出すると、「半藤君、これは残念ながら使い物にならないよ」と仰るわけです。どうしてかと聞くと、「この人、この時点ではこの立場にいなかったよ。さもいたような振りをしてしゃべっているけど、これは嘘をついているか、人の話を自分の話のようにしている。だから駄目なんだ」と。そういうことを何回も経験し、人間の証言というのは、インタビューをする方にある程度基礎的な知識がないと、簡単に話を創られて、真実を話してくれたように見せかけて嘘をつかれるということが沢山あり、大変危険なことだと気付かされました。それで私は仕方なしに太平洋戦争や昭和史の勉強をしていきました。

そういう意味で、例えば、陸軍の皇道派や統制派というのは権力争いで、負けたのが皇道派だと一般にいわれているわけですが、こういう話も取材を進めていくと全然違うんじゃないかと思えます。この二つは陸軍の内部にある対ソ戦略観の違いで、皇道派は早い目にまだ強力になっていない

ソ連と対決したが良い、統制派はまずは日本が国家総動員体制を確立してそれからソ連と対決した方が良いと、全く違う戦略観の衝突であったようなのです。

そういう具合に一概にこれはこういうものだと言われているものがちょっと調べて証言を取っていくとそれは違うということが判る。だから歴史というのは、通り一遍によし分かったというものではないのです。

でも、これはちょっと大変なのです。正直に言うと、今度『日本のいちばん長い日』の映画ができましたが、あれは50年前に、最後の14日の天皇の聖断は国民に訴えかけたものだとは私は受け取って書いているんですけども、その後調べてみるとどうやらそうではないですね。当時聖断に列席した24人のうち、梅津参謀総長のメモは昔から見ているのですが、これ一つだけでは信用してやるわけにはいかないと思っていました。ところが、のちになって吉積軍務局長のメモも残っているのを発見しまして、これらと『実録』を合わせてみたらびたりと合うんですね。天皇が14日の聖断で言った言葉というのは、『日本のいちばん長い日』に書いているような、あんな理路整然とした言葉ではなく、陸軍に対して、これ以上もう国家を滅亡に導くようなことをしないでくれ、頼むから言うことを聞いてくれという説得だったということがはっきりしてきたわけです。

これは今度改めて、岩波のブックレット『「昭和天皇実録」にみる開戦と終戦』で訂正しておいたのですが、後世の人はこの小冊子まで目が行かないで、『日本のいちばん長い日』と『聖断』だけで判断されるでしょうから、やっぱりもう少し丁寧に、戦争を何とかして止めないといけないという昭和天皇の強い思いをきちんと残しておかないといけないと思います。

▶**神田** 史料欠落を推測で埋めざるを得ないこともあります。過度のフィクションは、歴史を誤解させかねません。例えば、『坂の上の雲』の影響もあって、日露戦争で東郷・秋山神格化が再生

産されていますが、『日本海軍錨揚げ!』や『日本海軍の興亡』等で先生が明記された通り、バルチック艦隊を対馬海峡で迎え撃てたのは島村速雄第二戦隊司令官と藤井較一第二艦隊参謀長の卓見のお陰のようです。東郷平八郎が偉大な英雄であることは間違いないのですが、その神格化がその後、致命的な大角人事に繋がり、日露戦争の精神主義的総括が戦費調達から講和まで国際世論工作の重要性等を看過させた影響は無視できません。『歴代海軍大将全覧』では島村を謙譲の人と定義され、それは尊敬すべきことですが、史実は正確に後世に伝えられるべきと思うところ、先生はどうお考えになりますか。

▶**半藤** 島村さんは明治37年一杯までは連合艦隊参謀長で、38年の始めに同期の加藤友三郎と交代しますが、この交代の理由が実は良く判らないのです。司令長官の下に参謀長がいて、その下に参謀が沢山おり、参謀は参謀長を通さず直接司令長官に意見具申はできません。ということは島村参謀長が、秋山参謀他の参謀を統括していたわけです。ですから、作戦等を作るときは、秋山参謀達が意見を出しますが、最後の作戦構想は島村参謀長が作り上げ、それを東郷さんと相談して、これでいこうと決断されるわけです。ですから明治37年2月の開戦から12月までの10ヶ月くらいは島村さんが大体全部やったのです。

この間、ロシアの機雷でなけなしの戦艦2隻（初瀬と八島）を失っています。これは連合艦隊の6隻の戦艦のうちの2隻が沈んだわけですから、ものすごい痛手で、本来なら東郷平八郎は更迭されないといけないのです。ところが東郷さんもみんな残ってしまうわけです。艦長達を退役させろという意見もあったのですが、東郷さんが温情で退役させず、こうして、だれも責任をしっかりと取らないままで37年は終わりました。

島村さんは非常にさっぱりした人なので、誰かが責任を取るべきだと考え、俺が責任を取るといつて交代したんではないかというのが私の説なのですが、正しいかは判りません。島村さんは非常

に自分に対して謙虚で、「作戦は俺がやったんじゃないよ。みんな秋山がやったんだよ」ということをはっきり言って、秋山さんを立てたりしました。

▶**神田** 秋山参謀はやはり対馬ではなく津軽海峡説だったわけですか。

▶**半藤** そうです。バルチック艦隊がバンフオン湾を5月14日に中航したという電報をもとに、5月の24日か25日に対馬海峡に来るはずだと秋山は計算して、5月23日くらいから臨戦態勢に入っています。ところが25日になっても来ないので、連合艦隊司令部は慌てに慌て、これは太平洋から津軽海峡に回ったんだと考え、25日の午後3時までに敵艦を発見できない場合には全艦隊が錨を上げて北海道沖に行くんだということを決めました。

それをおかしいじゃないかと言いだしたのが島村さんです。彼は連合艦隊の参謀長をやっていたので、参謀たちの考え方の癖が判るのです。またこれとは別に、連合艦隊司令部は大間違いをしている、意見具申すべしと言いだしたのが藤井さんです。

この話を、実は司馬さんは『坂の上の雲』を書かれている時に知っていたと思います。というのも、この日露戦争の教訓が一杯入っている話は残っており、海軍大学校で4、5年の間、その事実をきちんと教えたことがあったようなのです。これを教わった人たちが、司馬さんの取材でその話をしたと思います。ところが残念ながら、本当の話を書いた『極秘明治三十七八年海戦史』〈全百巻〉が、司馬さんの目に入る機会がありませんでした。太平洋戦争が終わったときに、海軍大学校と軍令部にあったものは燃やされましたが、宮中に残っていた一部が、昭和天皇の最晩年の頃に、防衛庁戦史室にお下げ渡しになりましたが、司馬さんの執筆時には間に合わず、それを読む機会もなく、証拠がなかったのです。

日露戦争の教訓であるこういう大事なことを、どうして日本の海軍も資料を隠蔽して東郷神話を

盛り上げたのか。歴史観を狂わせた東郷神話が出来上がったのは昭和9年から12年にかけてです。東郷さんが亡くなった頃から作られたのです。この神話を使って、同時に、アメリカ太平洋艦隊を日本近海に迎え撃って、日本海海戦のような大決戦をやるという漸減迎撃作戦という戦略戦術が年月をかけて練り上げられました。それに猛反対したのが山本五十六など何人かの人たちなのです。

その意味で国家の進路を誤らせるような神話が作られたということ、今私たちは学ばねばならない。歴史というのはかぎりなくリアリズムで行かないと将来に対して良くないよというのが今私達が盛んに言ってることなのです。

▶**神田** 先生は海軍善玉論者と揶揄されることもありますが、実際は客観性を大切にされ、『サラバ海軍善玉論』で既に昭和62年の『昭和史の転換点』以前に旗幟を鮮明した旨、明記される通り、海軍にも厳しいところがあり、また、『ノモンハンの夏』でも、立論に不利な含意を持つソ連の情報公開の新資料を逃げずに引用していますし、『小柳史料』が出ると『総点検・日本海軍と昭和史』を出すなど、絶えず新史料のフォローを続けています。私も、阿川弘之『米内光政』、『山本五十六』、『井上成美』の海軍3部作を何度も読んだ一人なので、かなり海軍最良の先入観がありますが、畢竟、陸海共に、初期は良悪が併存したものの、良貨が駆逐されて開戦・敗戦を導いたが、終戦では彼らも頑張ったということかなと思うのですが、いかがでしょうか。

▶**半藤** そうですね。頭のいい人が揃っており、ちゃんと自分たちで数字をみていながら、なぜそうした実態に目をつぶって、精神論でアメリカと戦争をして勝てるということになったのか。これが本当に正直に言って分からないのです。開戦前にはかなりきちんと考えていたようなのですが、結局、昭和16年末の今なら勝てるという論理がどうして出て来うのか判りません。

▶**神田** 陸軍を説得して一部、大陸から撤退するというオプションを、精神主義の面子や予算競争のためにできなかったため、このままではジリ貧で油も切れて不戦敗になってしまうから、そうなるくらいなら戦争を始めた方がましだという発想だったのかも知れませんね。

▶**半藤** 結論はそうした理由で、今が戦えるチャンスだからやってしまおうというような話だったのでしょ。今話している参謀たちは軍人のように見えますが、実際は官僚なんだと思います。きちんとした組織の中であって、情報は集中し、会議もきちんとやっていながら、こうなってしまった。異論を言った人は明らかに左遷され部署を変えられています。また、官僚組織の縦割りの中で自分たちの職務については非常に忠実であるけれども、他のことには介入しない。特に海軍については、その掌にないものは発言すべからずという長い伝統があります。船で命令系統がはっきりしていなければ船はまっすぐ進まないの、そうなるのでしょ。そういう意味で、海軍省の人たちも軍令部の人たちも自分の掌だけは発言するが他は発言しないというのが徹底されていました。それを踏み破って発言するのが井上成美であり、山本五十六であったのですが、嫌われて追い出されました。日本の組織というのはどうもそういうところあるんじゃないかなと思います。

アメリカの場合は全く違っており、昇進していつて少将までは行きますが、そこで止まってプールされます。真珠湾で奇襲攻撃を受けてキンメル太平洋艦隊長官が更迭されますが、次を選ぶ際、少将28人を等分に見て、負け戦で意気消沈している時に、上から士気を持たせて戦うためには誰が良いかという視点で、ニミッツ少将にします。成績でいうと28人中26番目で、ニミッツが優秀であったからかというより、普段から非常に意思堅固で頑固なところを見ていて、テキサス生まれの彼を抜擢するのです。

アメリカでは、あるプロジェクトについてこの長は誰が良いかというときに、同じような形で人

を見て、抜擢し、それで失敗するとこの長をまた元に戻します。日本は正反対です。この両者の相違は現在でもそうじゃないかと思います。ですから、失敗が起きその責任者を明らかにする場合、アメリカであればこの責任者は元の職に戻るだけなのですが、日本の場合は、責任を取らされると退役することになってしまうので、日本の中の温情主義、家族主義が働き、責任者を出すのを嫌うようです。本人が腹を切るのは日本の歴史を通じてあることなのでこれはこれで良い伝統なのですが、組織としてそういう形にするのをあまり好まない傾向があります。

（戦時の人物再評価）

▶**神田** さて、戦時には評価が難しい存在や魅力的ながら余り史料が残らない方も多々いますが、時間の関係で、インドネシア善政の今村均や、私を硫黄島に行かせた合理的持久戦の栗林忠道、情報参謀の神様、堀栄三中佐等は残念ながらまたの機会とし、今日は8人だけ、扱わせてください。特に、初期に好戦的だった米内、石原、武藤等が、終戦や戦線不拡大に注力した歴史の皮肉に関心があります。

まず、米内光政。第二次上海事変で戦争を拡大させ、『昭和史裁判』で書かれたように、トラウトマン工作継続を多田駿参謀次長が訴えるのに米内が最も強硬論を唱え、爾後国民政府を対手とせず、に至ってしまいました。三国同盟を一旦、阻止しましたし、早期終戦のために尽力されたことは評価すべきですが、対陸軍のライバル意識も強かったともいわれ、どう評価されますか。

▶**半藤** 先ほどの海軍三部作を書いた阿川先生は大先輩で、「阿川さん、あの三部作は良くない点が随分ありますよ」と言うと、阿川さんは、「良くないって言ったってあれはちゃんと取材していて、その限りでは米内さんてのはああいう人なんだよ」と言いましたが、米内は総理大臣としては本当に無能で褒めるところがなかったと思います。その米内が名前を残したのは昭和14年平沼内

閣での日独伊三国同盟への反対で、あの時の米内さんは微動だにしません。「日本の国にとってこれはいけない政策ですから、これについては海軍は何を言っても反対」と言って、五相会議の場で、米内さんはぐらつきません。山本五十六次官、井上成美軍務局長が支えていたというもありますが、米内さんは非常に包容力のあった方みたいです。

米内さんの言葉で一番残っているのは「魔性の歴史」であり、昭和史というのはどうにもならないくらいたちの悪い人間が跳梁した時代で、これに対してどんなに抵抗しても抵抗できない部分があった、という時代観をもっているんですね。そういう意味ではちょっと諦めが早いと言うんでしょうか。でも動かないときは本当に意見は岩石のように動かないんだそうです。それも、全く融通が利かない硬い人ではなくて、非常に柔らかいんだけど、とにかく動かない時は動かないと。そういう意味では米内さんって偉い人なんですね。

彼が本領を発揮するのは昭和20年の鈴木内閣の時ですが、すぐに自分で海軍兵学校校長だった井上成美を次官に引っ張り出してきました。当時兵力がなくなっていた海軍に対し、陸軍から強硬に、海軍を陸軍に吸収して陸海一体化しようということを書いてきていました。これに対し、そうなる、いざ終戦のときに陸軍の圧力に抵抗するものがなくなり、本土決戦なんていう馬鹿なことをやらざるを得なくなるということで井上を呼んだわけです。

井上は徹底して戦いました。彼は、陸海軍一体化の話が昭和20年の4月の末に決着がつくまでの2、3ヶ月の間、陸軍に対し断固として反対し続けたわけです。結局海軍は残って、終戦の時に力を発揮することになるのですが、そういう意味では米内さんは肝心なところでは重要なことをやるんですね。ただその後井上と喧嘩してしまいます。

▶**神田** その井上成美。先生も『日本海軍の興亡』等、三国同盟を止めたトリオ時代を中心に様々な本で書かれていますが、やはり井上さんは天才肌

の凄い逸材であり、『我が闘争』の原典を示して論理で圧倒するところなど大いに尊敬するところですよ。その井上で気になるのは、『指揮官と参謀』でも書かれたように、高木惣吉少将に終戦工作を指示しておきながら、不本意な大将信任後、次官を辞して以来、米内と仲直りせず、没交渉になった経緯、特に米内がどう考えていたかです。先生は、『日本海軍錨揚げ!』等で秦郁彦や阿川弘之の大臣候補温存説を退けられ、『歴代海軍大将全覧』で陸軍と対立しすぎたため外したと示唆される一方、『総点検・日本海軍と昭和史』では海相温存説も示され、私は混乱しましたが、どのようなのでしょうか。

▶**半藤** 米内さんと井上さんがなぜぶつかったかという、米内さんは非常に気を遣う人なのですね。つまり、陸軍と無茶苦茶にやりあったので、陸軍が井上に対してものすごい殺意を持つわけです。それで井上を残しておくに危ないと、米内さんは思うんですね。昭和14年の時もそうです。山本五十六の身が危ないというので、米内さんは山本を海に出した。これが米内さんのいいところです。この時はそこに井上の大将進級の時期が来たわけです。軍は戦争中であろうが時期が来れば平時と同じように進級させます。井上は、こんな大事なときに平時の人事考査なんて吹き飛ばせ、俺が支えるからと言うのですが、米内は井上が殺されたら大変だと思い、大将の時期が来たから大将にする。大将の次官はこれまで歴史の中で例がないので、井上は、それじゃあ辞めろということなんだと米内さんと袂を分かってしまいます。米内の方は、井上があんなに怒るとは思っていなかったのではないですか。だから温存するために米内が井上を外したっていうのはある意味では正しいのですが、もう少し違う意味で米内は井上を大将にしたわけです。

井上は怒ってしまっ、結局、米内とはその後口を利きません。戦後すぐに米内さんが亡くなった時に、葬式にも出ませんでした。あんなに米内・井上は名コンビとだったのにどうして来ないんだ

と皆、驚きましたが、井上の中にははじめがあったのですね。

▶**神田** 次官を辞めた後の大事な終戦工作の局面で井上さんが何もしていなかったとも思えないのですが、どうされていたのでしょうか。新名丈夫『沈黙の提督 井上成美 真実を語る』で、終戦工作は高木少将に任せたので後は知らない、という井上の証言を載せていますが、本当に完全隠遁していたのでしょうか。

▶**半藤** これは本当に何もしてないのです。時々東京に来ているようなのですが、ずっと引退したきりです。私も戦後に2回井上さんに手紙を出して会いに行ったのですが、なかなか話されません。本当に心を許す人間としか話さなかったようです。そのくらいはじめがしっかりとした人だったのですね。そんな人ですから、山本五十六とあんなに仲がいいのですが、山本さんは大将の中でまあ良い方だったが、たった一つ間違っただけでと叱咤するのです。それは開戦前に「半年や一年は暴れ見せるが後のことは分からない」と近衛さんに言ったことで、あんなことを言うなら「戦争はしてはいかん、戦争は負けます」とはっきりと近衛さんに言うべきだったと言っています。

▶**神田** 数年前、長岡の山本五十六記念館にも行ってきましたが、先生は故郷の偉人に厳しめです。度胸や戦略眼は優れているものの、『撤退戦の研究』等で、人見知り故に大事な戦略の説明や説得を怠ったこと、今も言及されたように、近衛首相に軽率な発言をしたこと、そして、ミッドウェイの致命的失敗で責任を取らず取らせもしなかったこと等が指摘されます。先生は山本をどう総括されますか。

▶**半藤** 山本の中にあるというだけではなしに海軍全体の中にあるのは、先ほども話した、日露戦争の経緯です。日本海海戦で戦艦二隻が沈んだ時に、責任を東郷さんも島村さんも誰も取らなかつ

たのです。ですから、戦争中にこれくらいの痛手を被ったからと一々代わっていたのでは戦争はできないという考えが、山本だけでなく海軍全体の中にあっただと思います。つまり、日露戦争の時にそうだったんだからこれくらいの痛手は当たり前だと。実際は日露戦争の戦艦二隻は、イギリスから買ってきたばかりの日進・春日という重巡洋艦で十分補うことができましたから、痛手といっても致命的だったミッドウェイとはだいぶ違うわけです。

真珠湾攻撃で山本はもう神様のようになっていますから、山本を辞めさせるということはできなかったでしょう。艦隊長官の南雲忠一と参謀長の草鹿龍之介は辞めさせた方がよいのではないかとということになりますが、これは山本の温情でそうしなかったということになっています。ミスというなら、これこそが本当なら大ミスですよ。というのも空母6隻のうち4隻が沈んでしまったのですから、これはもう致命傷です。天皇にも4隻沈んだというのは報告せず2隻と嘘を言っているくらいこれを隠さなければならなかったのは、これが致命傷であると海軍が判っていたということだと思います。それなのに責任を取る人なしでは、山本さんを弁護できませんね。ただ裏側には日露戦争の時の経緯があったわけです。

▶**神田** 高木惣吉ですが、終戦工作の最大の立役者の一人であった一方、『昭和史裁判』では、官房調査課長が情報を米内、山本、井上にも入れない対米強硬派だったと記しています。彼はどんな方だったのでしょうか。

▶**半藤** 高木さんには戦後何遍も取材しました。そこで「これは違うのではないのでしょうか」というと、「そうじゃないよ、君」というようにほんとうに親切的な教えを受けました。大人しい方に見えますが、実はかなり激しい人でした。自分のしたことでも戦後一番悔やんでいることは、東条暗殺計画を早くしなかったことなのだそうです。何遍も会っているうちにポロツと話してくれたんです

ね。この計画は、当時、人事局にいた神重徳を使ってやろうとしたそうですが、高木さんは本気になってやろうとしたのは自分だということです。実行の日を決めて逃走のための飛行機まで準備して、いよいよという日に東条内閣が辞表を出したので、未遂になったわけですが、これはもっと早くに私がやるべきだったと言っているくらいに本来は激しい人なんです。

また、高木さんに国防政策委員会の第一委員会のメンバーリストを見せて、「ここには太平洋戦争が始まるときの中心人物、対米強硬派がそろっていますがこれはどういうことなんですか、このメンバーを見れば第一委員会がどういう戦争指導をしたか一目瞭然じゃないですか」と聞いたところ、高木さんは「こんなものはなんでもないよ」とはっきり仰るんです。陸軍から話を聞くと、「当時は海軍の第一委員会が猛威をふるって、南部仏印進駐は海軍がやったもので、陸軍は寧ろそんなことをすると対米戦争になるからやめた方がいいと反対していたくらいだ」と言うのですが、高木さんは、「そんなことはない。あれは陸軍がやった」と、そこは非常にきつい言い方でした。あの人の中に海軍軍人として非常に海軍を愛しているところは感じました。

和平工作の件は米内さんと井上さんが話して、二人はとにかく陸海一体化の議論に本気で取り組んでいて和平工作にまで手が回りませんので、高木さんにやらせるということになりましたが、これは井上さんの案でした。その井上さんに高木さんは報告もしてないんですよ。これは私も事情が判りません。高木さんの和平工作を非常に評価する人もいますが、私の調べた範囲ではそれほど評価できないんじゃないかと思います。

▶**神田** ビジネスから皇族まで忍者のようにやったという話もよく出てきますが、そうではないのですか。

▶**半藤** そうではないと思います。井上さんが次官を辞めてしまつて、6月くらいにこの工作は中

止ですからね。従って、海軍の和平工作が戦争終結のために役立ったということは、私の調べた範囲では余りないのではないのでしょうか。むしろ、役立ったとすれば、東大の南原繁法学部長を始めとする7教授がまとめた工作の方だと思います。あの人たちがまとめた終戦工作のとおり終戦は動いていますし、私はあちらの方がはるかに優秀な工作であったと思います。

▶**神田** 7教授の計画は立派だったと聞きますが、それを実行するためにどのような政治工作のチャンネルがあったのですか。

▶**半藤** あれは木戸さんに提出しているんですよ。木戸さんの終戦工作というのは殆ど、東大7教授の工作のままです。20年6月8日に御前会議で徹底抗戦が決まるわけですが、その時に天皇が、「こんなものが決まっちゃったよ」と木戸さんの方にぼんと投げたといいます。徹底抗戦というのは一応御前会議で決まったけれども、本当のところは天皇は反対だということを木戸さんはしっかり受け取って、自分の和平工作案を書きます。それは殆ど東大7教授のものなぞっているものの、ソ連仲介の和平を採用しています。東大7教授の案は、それはだめでアメリカと直接交渉した方が良くしています。ただ7教授の方の和平工作は7人が口をそろえて、これを外に漏らさないことになっていて、誰も話さないため、戦後になっても7か条の項目を除いてはどういう風にしてこれを話し合ったかということが出ていないのです。我々は学問としてこれを考えただけであるので、これを我々の功績にするものでないということです。これは残念なことで、こういうのがきちんと出てくると戦争終結に向かつての日本の動きがもう少しはっきり見えてくるのですが。

▶**神田** 先ほど高木さんのところで国防政策委員会の話が出てきましたが、『ドキュメント太平洋戦争への道』で不規弾・石川信吾の開戦に向けた第一委員会等を舞台にした暗躍が描かれ、『指揮

官と参謀』等では本人の、この戦争は俺が始めさせたようなものだよ、という発言も引用されています。他方、『昭和史裁判』等で、高木の第一委員会の過大評価を斥ける発言を引用しつつ、高木自身が第三、第四委員会にいたことを明らかにされています。石川の評価については、『小柳史料』が誇大にしているという説もありますが、実際の影響力はどの程度だったのでしょうか。

▶半藤 率直に言って、海軍の人も陸軍の人も石川さんに敬意を表するんです。海軍軍人は政治的な根回しができる人がいませんでした。海軍と陸軍の参謀たちが会議をするときに、陸軍はきちっと数字を出して資料を積んでくるそうですが、海軍は手ぶらで会議に来るだけで、陸軍が資料に基づいてやると全く歯が立たない。海軍はいつもへこまされてすごすごと帰っていく。

そういう時に石川信吾というものすごく根回しのいい人がいて、この人がどんどこにも恐れなくて行って交渉をしてくる。こんな人は海軍の中では珍しいと言ってみんな褒めているのです。石川は長州生まれで、松岡洋右とツーカーの間柄だったように、顔が広がったようです。但し、不規則のようにどこに飛んでいくか分からないところがあったため、山本五十六や井上成美達から見ると非常に危険なところがあったようです。

石川が最後に隊長であった時の部下に東大の先生がいましたが、その人が自分の思い出話でエッセーを書いています。その中で、「この戦争は私が始めたようなものだ」とこの人が本人の口から聞いていることが記されています。戦争が始まってからは政治軍人が海軍には必要なくなって、要職から遠ざかっています。

▶神田 海軍で、堀悌吉も最も尊敬すべき人材の



一人と思います。『日本海軍の興亡』等で、天才井上に、我々とは頭の程度が違うと言わしめた逸話も出ていますが、宮野澄『海軍の逸材 堀悌吉』位しか整理したものがなく、予備役編入に追いやられ、山本五十六を嘆かしめた堀について、もう少しご教示ください。

▶半藤 堀悌吉は早めに海軍を去ってしまっていますから、私達も正直ものすごく大事な人だというのは知らなかったもので、会いに行きませんでした。殆ど誰も会ってないんじゃないでしょうか。堀は実に整理のいい人で、彼が残した『五峯録』という本に山本五十六や古賀峯一の手紙や話し合った内容が全部とってあったので、この本を読んでも、私たちは戦後、山本が何を考えていたかとか、古賀さんも実は対米協調派であって戦争反対であったとか、そういうことが判るわけです。この人が全部残しておいてくれたから、海軍がもう一度見直され、海軍は開明的で戦争反対であったと浮かび上がるのですね。そういう意味で非常に大事な人だったわけですが、私たちはこの大事な人に取材もしなかったことが悔やまれます。

今度、大分の先哲史料館が東大の芳賀徹さんをお願いして、堀悌吉の伝記を書いて頂きました。

これは非常に短いものですが、要領よく書いてありますので、この人がいかに海軍の中の良識派で山梨勝之進と一緒に海軍建て直しのために懸命に頑張ったかというのがよく判ります。

▶**神田** 陸にちょっと戻りますと、やはり石原莞爾です。先生も、『昭和陸海軍の失敗』等で詳述されたように最も遠大な戦略感をもった將軍で、私も、小松茂朗、楠木誠一郎、特に福田和也『地ひらく』等、読みましたが、取材先の石原の支援組織毎の相違もあってか、なかなか像を結びません。二つ教えてください。まず、満州事変が石原参謀を中心とした関東軍の主導だったのか、一夕会が支配する軍の総意としてのシナリオだったのか。後者だとすれば、石原の理念の五族協和が植民地化に変質させられたのも判ります。

▶**半藤** 石原さんという人は、非常に大きな人であり、また同時に神格化されているのです。だから石原莞爾を自分の物と思っている人が何人もおり、それぞれの見方からするとお互い全然違うのです。一つの宗教に近いものがあり、その全体像を捉えるために取材を始めると、信奉者たちの意見がそれぞれ違って訳が分からなくなってしまいます。

まず、永田鉄山、小畑敏四郎、岡村寧次達が、大正10年にドイツのバーデンバーデンで会って、陸軍は明治の終わりから大正にかけて長州閥が徹底的に牛耳っていますから、この派閥をとにかく打破して人事を刷新すること、軍制を改革すること、総動員体制を作ること、満蒙問題を解決することということで一致して、ご指摘の一夕会を結成するわけですね。

この集まりの中に勿論、石原がいるわけですが、一夕会ができた昭和3年から満州事変が起きる昭和6年までに、このメンバーが軍の中堅として派閥解消のために動き、見事に陸軍内部を刷新するわけです。満州事変の直前には一夕会のメンバーが陸軍省と参謀本部の中堅の課長クラスの要職を本当に全部占めています。一夕会は後に皇道派と

統制派に分かれてしまいますが、それまでは彼らは同志でした。

一夕会の基本は、第一次世界大戦の教訓として、日本の現状では総力戦には応じられないため、統制によって国家体制を変え国力を結集して総動員体制を作った方が良くということです。その設計図を描いたのは永田鉄山であり、永田が中心になっています。ところが、石原が一夕会に入っているのは、満蒙問題を解決するためです。石原の関心はその一点にあったと思います。

さて、石原の最大のテーマは満蒙問題の解決ですから、満州に行った方がいいということで石原も喜んで満州に行き、板垣征四郎もついて行きました。これがまたいいコンビネーションで満州事変を起こすわけですが、決して関東軍のこの人たちだけがやったことではありません。明らかに中央の中堅の連中がみんな後押しし、反対していた将官クラスはみんな撃破されます。そういう意味では満州事変というのは、陸軍の総意です。前の年に張作霖爆殺事件で河本大佐が責任者として浮かび上がって、河本を首にするかどうかを上の方で議論し始めたときに、一夕会のメンバーが頻繁に集まって河本を守っていますので、あそこから始まっているのです。

▶**神田** 当時、参謀次長が止め役で行っていますが、彼はどういう立場で行ったのでしょうか。

▶**半藤** 事情は承知して行っています。寝耳に水の事件ではなくて、多分あるぞ、あるぞと思ったときにやったんですから、それはもうみんなグルだったのでしょう。でないとあれだけの事件を起こせませんよね。天皇陛下が、満州事変から歴史はおかしくなったと仰っていますが、これは決して間違っていないのです。

ただ、石原だけを取り出すと、石原にもものすごい構想があつて、板垣という何事にもびくともしない人がいたという話になります。石原は頭のいい人ですから、諦めるのも早いわけです。事態拡大に猛反対していた本庄繁を説得するのに、石原

は、「あいつは話にならん」と諦めてしまいました。板垣は黙って本庄の顔を一晚中見ていたそうです。それで本庄繁も、閉口して「分かった。分かった」と説得されてしまった。そういう意味では名コンビだったわけです。

だけど後ろに支えがなければあは行きません。現実にもすごい軍律違反ですし、軍法会議にかけないといけないような独断専行です。ところが一夕会のメンバーが後ろで支えていますから、誰もそれを軍律違反とはいわず、みんな凱旋將軍扱いとなったわけです。

▶**神田** 規律と関係して、もう一つ。先生が、『賊軍の昭和史』や『昭和天皇実録の謎を解く』で提起された石原の2.26時のクーデター策謀説です。海軍陸戦隊の動き等を状況証拠にされていますが、石原は既に作戦課長の要職にあり、実際、鎮圧後、皇道派一掃に成功していますので、その動機が判りません。もう少し敷衍頂ければ幸いです。

▶**半藤** 事実としては仰る通りで、クーデターなどしなくても総動員体制にすぐに行くわけですが、それは日中戦争が起きたからなのです。これがなければ、昭和13年に国家総動員をいきなり持ち出してきて国会を通るというわけには行かなかったでしょう。

福留繁という海軍軍令部の作戦課長がいて、作戦課長同士で石原莞爾と同じ戒厳司令部におり、石原の動向をずっと見ていましたが、石原の動きはどう考えても反革命をやろうとしていると、福留は書いています。今までそれに注目した人はいませんが、私はそれを読んで、そういうことかと思ったのです。2.26の時、海軍は米内さんと井上さんが陸戦隊を出して、戦艦も東京湾に呼びつけ、大砲を議事堂の方に向けていたといいます。そこまで海軍が動いているっていうのはどういうことなのか。石原莞爾はチャンスを見て反革命をやろうとしていたと思いますよ。

それに、石原だけではないと思います。永田鉄山による『国家総動員法』という、一次世界大戦

が終わってまもなくの頃の本があり、本文には思想のようなものがありますが、付表としていろんなことが書かれています。石油や電力をどう統制するとか、革製品はどうするとか、ありとあらゆることについて、どういう風にして足りなくなってくる物資を補給するかまで、永田は全て書いています。そういうことから、陸軍は第一次世界大戦が終わった頃から、本気で統制国家にして国家総動員体制をいつでも敷けるように準備していたというのがはっきり判りました。日中戦争が昭和12年7月に始まって、国家総動員法が提出されるのは13年の1月で、わずかしかなかった。その期間にあんな詳細な動員法を陸軍が案出できるとは思えません。どうしてこんなものがあつという間に出てくるのかと思ったら、全部準備していたわけです。永田は昭和10年に殺されましたが、その衣鉢を継いだ人は武藤章を含め、沢山います。そうして国家総動員について永田の教えを受けた人たちが法案を出してきたわけです。

石原の動きを見ていると、満蒙問題の次は国家総動員のトップに立つことも、ある程度考えていたのではないかと思います。石原の中には世界最終戦争論がありましたから、そんなに早く戦争に入っては駄目で、もっと国力を整備してから最終戦争に蜂起した方が良く考えるわけです。それで2.26事件をチャンスと見て、一気にそこまで国内体制をもっていこうとしたのではないかと。そう見えるのですよ。ところが、海軍が強く出たのでそれは成らなかった。しかし、翌年に日中戦争が起き、その機会が思いがけなく到来してしまう。こうして陸軍の多くは、国家総動員法は成立したし、他にもどんどん法律が出来上がってきて国家総動員の方に進んでいますから、もう力がついた、大丈夫と戦争を急ぎました。石原はそれに反対したのです。

▶**神田** そこで石原は武藤章に反駁されたわけですね。『昭和陸海軍の失敗』等で示される通り、石原が作戦部長として盧溝橋後の不拡大に努めたと

き、武藤章作戦課長から、貴方と同じことをしているだけだと反論されたことは有名です。川田稔『昭和陸軍の軌跡』では内蒙作戦中止の時も同様のやり取りを記録しています。しかし、武藤はその後、『指揮官と参謀』でも示唆され、保坂正康『陸軍省軍務局と日米開戦』に詳述されるように、日米交渉を必至で迫及して失敗し、『あの戦争になぜ負けたのか』で書かれたように、レイテ決戦に反対したものの押し切られ、最後はA級戦犯として果てます。武藤は当初は無知で後に改心したのか、もともと一貫した考えがあったのか、先生の分析をご教示ください。

▶半藤 武藤さんは非常に頭の回転が早い人なんだそうです。だからこれはおかしいと思うと自分で考えて、これはこうした方が良いのではないかという風にならざるを得ない。考えがひょいっと変わる。だからあれは武藤ではなくて「無徳」だ、いくらでも意見を変えろというので、嫌う人が多いのです。

ですが人より頭が良いのです。対米戦争を行うなんていうのは武藤さんの頭にはなくて、やはり対ソ連戦なのです。だから東条さんに猛反対し、東条さんが嫌って飛ばすわけです。

そういう意味では武藤さんは硬直した頭の人じゃなくて、ちょっと気の毒な人なのです。石原莞爾に嫌味を言ったというのは事実ですが、石原が自分のやったことに一生懸命反対しているのはおかしいではないですかというだけの話です。だからといって石原と武藤の仲が悪くなったということではないと思いますね。ただ結果として、石原は飛ばされて、武藤も喧嘩両成敗で関東軍に飛ばされます。その当時の関東軍にいたのが山下奉文です。山下と武藤は皇道派と統制派として全く考えは違うのですが、一緒になってみたらお互いに人間的に認め合ったのです。

最後はフィリピンに持っていかれて、そのために武藤さんはA級戦犯で絞首刑になりました。あれは簡単に言えばバターンの死の行進などについて、山下奉文も向こうで絞首刑になり、本間雅晴

も銃殺になり、二人の責任者がいなくなってしまうため、武藤さん以外に責任を取らせる者がいなくなってしまったということのようです。武藤さんは絞首刑になるような働きはしていませんが、非常に才能ある知恵の働く人だったばかりに、陸軍の中でもあまりよく言う人がいなくなってしまったというのは秀才の悲劇でしょうね。

(歴史の現代への含意)

▶神田 最後に、いくつか歴史のインプリケーションをお伺いできればと思います。私は、財務省人事、大蔵省改革、財務省改革等に携わった際、大組織の運営に関し、最新のマネジメント論と併せて、歴史書もできるだけ読み返し、先生の軍隊組織分析も参考にしたことを思い出します。

まず、『賊軍の昭和史』、『昭和陸海軍の失敗』、『ドキュメント 太平洋戦争への道』等からは、派閥人事厳禁の教訓です。長州閥の不公平の反動として永田鉄山の一夕会が生まれ、統制派、皇道派の抗争を経て、統制の乱れと人材の枯渇が生じた。海も大角人事で艦隊派が条約派を一掃した時、破壊が確定しました。また、『総点検 日本海軍と昭和史』や『あの戦争になぜ負けたのか』、『撤退戦の研究』等では、小沢治三郎でなく、南雲第一航空艦隊司令長官としたハンモック・ナンバー人事や砲術中心、軍令部支配の大失敗から、採用・昇進における能力主義の徹底や多様化を復習し、財務省では相当に徹底されるようになっていきます。また、台湾沖航空戦戦果を糊塗したため、大本営発表で身内も作戦を過つという失敗から、正しい情報のタイムリーな共有も不可欠です。『総点検・日本海軍と昭和史』等で、福留繁参謀長の海軍乙事件が記されていますが、信賞必罰の必要も大きな教訓です。他方、『昭和陸海軍の失敗』は『失敗の本質』同様、兵站軽視の問題を示していますが、霞が関は、諸外国で最も少ない陣容で、人的・物的リソースの不足する中、なかば気合で頑張っている精神主義は変わらないかもしれません。

さて、『戦後史』で、先生は官僚に対し、根拠

なき自己過信、驕慢なる無知、底知れぬ無責任と痛烈に批判されています。我々もバブル期の規律の乱れや政策論の劣化に怒りを覚えることがありましたし、自省を続けなければなりません。他方、現状は全く逆のリスクがあるというのが実感です。例えば、財政破綻や少子高齢化・人口減少の問題を官僚はずっと以前から危機感をもって状況を説明し、処方箋も提示してきたのですが、力不足のため、選挙第一の政治を説得しきれずに今日に至っています。特に、近年は更に政治が強くなり、政治がポピュリズムに翻弄される中、寧ろ、リスクを取って正論を貫くよりも、政治の指示待ち、或は、保身に走ることが多い、つまり、霞が関の市役所化が進行しているという批判も強いところです。先生はこの状況をどうお考えになりますか。

▶半藤 日本では、60年安保の混乱の前から、高度経済成長、廃墟からの復興・再生の計画が良くできていたんだということが、戦後史をやる中で判りました。昭和31年に「もはや戦後ではない」と言った時には、なにも精神状態としてもはや戦後でないという意味ではなくて、経済的な国家再建という意味の歩みが始まっていたということです。そのときの大蔵省や経済企画庁の人は、国家のためというか社会のためという、公僕という意識がかなり強かったと思います。

日本の近代国家ができ上がった過程を見ると、軍隊は天皇の軍隊で、官僚は天皇の官僚です。従って、戦争が終わるまでは、少なくとも民衆とか国民とかいうのは頭になかったと思います。戦後は、国家の軍隊は解体させられましたが、天皇の官僚はそのまま残りました。しかし、当時の官僚の中には、天皇の官僚という伝統から脱却して、新しい国家を作ろうという意識が芽生えて、一所懸命に国家再建に乗り出したのだというのが率直な感想です。それが今なくなっているんじゃないかというのが私の心配なんです。

率直に言って外から見ていると今官僚は弱いですよ。政治家に引き回されているという感じで

す。官僚は優秀なのですから、この国家をどちらにどういう風に進めていくのかという目標を定めて、きちんとした設計図を考えないといけないと思います。永田鉄山らが国家総動員法を進めていって国家を滅ぼしてしまったのと同じようなことをしろとは言いませんが。ところがどうも皆さん政治に追いまわられて忙しすぎるのか、国家百年の計、それが無いのではないかと思います。

基本的には政治が駄目だからいけないんですね。国家が成立するには、機軸が一つちゃんとなければいけません。この機軸というのは、明治時代は天皇制官僚国家を作ること機軸にして、国家目標は富国強兵ということでした。昭和の太平洋戦争までの国家は現人神の天皇を機軸として、大東亜共栄圏という夢みtainなことを国家目標にしました。そして戦後は、憲法を機軸にして、再生から復興そして繁栄という国家目標がありました。

ところが1992年にバブルが完全に崩壊してから、わが国は国家目標がなくなってしまった。というよりも先に世界が変わってしまったんですね。今となると結果論でしかないんですが、日本が非常に不利だったと思うのは、冷戦構造が終結して、私たち日本人がこれからどうしていくのかを真剣に考えていかなければいけない時に、阪神大震災とオウム事件等が起きてしまって外に目を配れず、出遅れてしまったところがあるでしょう。ですから本当に国家目標をどうするのか、国家の機軸をどうするのかということを考え出したのはここ10年くらいだと思います。

▶神田 反論ではないですが、財政再建にせよ、少子高齢化・人口減少対策、競争力強化のための構造改革にせよ、霞ヶ関は数十年前から警鐘を鳴らし、一定のプランを示してきましたが、力不足で、選挙を抱える永田町を通しきれなかったところがあります。国民に理解して頂き、国民が選ぶ政治家に決断して頂かなければ改革はできないのですが、それが困難だったのです。でも、不十分ながらも、これまでできなかったような改革が、

今、着実に実施されつつあることも事実です。

ただ世論や時代精神というものは鶏と卵で、我々は政治を説得しなければ政策実施できませんが、政治家は、選挙民に受けるものでないと無理だから、結局、選挙民に影響を与えるプレスや民度の問題だと仰い、プレスも、視聴者や読者に受けるものでないと無理だから、やはり民度の問題だと仰る。しかし、子供が親となり先生となり、また、国会議員や記者になるわけですから、この世代循環の中で、誰が悪いといっても仕方がなく、我々は、公僕として、やれることを一層、懸命にやるしかない、そしてその環境は厳しくなっているということです。

各国とも一番変わったことというのは、ポピュリズムの勃興で、やはりIT化が大きいと思います。先生は『日本海軍の興亡』で、国民的熱狂を作っても流されてもいけないとされ、ポピュリズムの危険を訴えています。『昭和史』や『あの戦争になぜ負けたのか』では、満州事変を契機にマスコミが反軍部から戦争万歳に豹変したこと、先生の文春についても、国連脱退に批判的だったが、帝大事件で総崩れとなったこと等が紹介されています。現在、民主主義の両極化、近視眼化が進み、嘆かわしいことですが、IT革命によるネット環境が両極化を加速しているのは事実です。先生が『昭和史裁判』でも主張された 多様性保持の重要性に共感しますが、主権者が単純性を求める危険な現実はどう対応すればいいでしょうか。

▶**半藤** 国家の目標というものを作るのはやっぱり官僚だと思います。少なくとも昭和が終わるくらいまで、戦略とスケジュール表を作ってきたのは官僚でした。が、今それがないんじゃないかということです。国債をこんなに出していたら破綻するというのも、少子化ももう10年も20年も前から判っていることです。これに対し、小手先のように目の前の対応だけでなく、10年20年先を見据えた対応策をきちんと考えるのが僕は官僚だと思っているのですが、その官僚の力が弱すぎるのが問題なのです。対症療法だけでは大病は治せ

ません。しっかり頑張ってもらわないといけません。

▶**神田** 官僚の機能といえば、戦前、戦中の財政当局の役割については、2.26で高橋是清達が暗殺され、翌12年の臨時軍事費特別会計設置以降、マージナライズされたといわれます。先生の著作で大蔵省関係の記述を拾うと、『日本海軍の興亡』で、ロンドン軍縮条約調印式の夜、賀屋興宣が酔った強硬派の海軍随員に殴られて鼻血を出した逸話、『昭和史』等で、14年に板垣陸相が三国同盟を提案した際、石渡莊太郎蔵相が米内海相に勝算を質し、勝てる見込みはないとの返事を引き出して止めた話、他方、16年11月4日にその石渡による、膨大な戦費がかかり悪性インフレの危険はあるが、戦時公債を強制的に売りつけることによって我国の財政金融は持久力ありと判定するという無責任な発言、『総点検・日本海軍と昭和史』においては、石川信吾が高橋蔵相の上塚司秘書に直接、予算要求を話したら、全部、高橋を通ったという話、そして、『昭和史裁判』では賀屋蔵相が予算措置からして派兵はむりとするのを米内海相が怒鳴りつけた逸話等を見つけました。先生は、戦前・戦中における大蔵省の役割をどう見ておられますか。

▶**半藤** 私は経済にはまことに弱い男なんです。昭和15年度予算編成を調べたことがあります。支那派遣軍が百数十万人に膨れていたところ、もう侵攻作戦はやめているので、そんなに大陸におく必要はないため、50万に減らすこととし、その結果、54億円くらい余ると査定されたわけですが、この余った予算をどうするかについて、陸軍と大蔵省が正面衝突します。陸軍が、余った金を全部装備の刷新に使いたいといったら、大蔵省は断固としてノーであるというわけです。当時の主計官、福田赳夫がたてつきまして、これに参謀本部の作戦課が乗り出してきて、貴様らがそんなことで揉めるなら中国大陆の兵力の削減はやらない、作戦用資材に更に対ソ戦用の弾薬を追加すると、陸軍

省軍事課も嘖然とするようなことを言い出します。作戦部長の富永恭次が大蔵省の言うことは認めないと頑張り、大蔵省は、何を言うんだと、これを突っぱねます。参謀本部作戦課が54億円を要求する中、陸軍省がもともと44億円要求していたのだから、そんなに言うなら2億円追加して46億円を陸軍省の方に出すという案で、青木一男大蔵大臣が畑俊六陸軍大臣に直談判しますが、なぜか陸相は受け入れず、両大臣は物別れになります。それから揉めに揉め、「将来財政これを許すに至らば既定方針を実行する」という条件つきで48億9千万円で妥結したというわけです。

私はこれが戦争前の最後の官僚の抵抗だと見ています。この時ついに一般会計61億円に加え、臨時軍事特別会計が40億円になって、初めて100億円を越えました。そして翌年開戦です。この折衝を見ていて、今の官僚の人たちもこのくらいの抵抗をしているのかなと思います。

▶**神田** 昔より遥かに権限もない中、結果は不十分でも、限界まで理論武装と議論、折衝をやってきた自負はあります。その官僚論について、『原爆の落ちた日』で唸らされたのは、ラビノヴィッチ博士が起草しジラード博士が推敲したフランク報告書が示す科学者の理性と良心、そして、トルーマン大統領に原爆使用留保案を直訴し、退けられた日に辞表を出したラルフ・バード海軍次官の行動です。バードの行動は遅すぎたわけですが。

▶**半藤** あそこに書いてあるのは二人か三人しかいないのですが、物理学者がかなり反対しているのです。私はこういう人たちは今だっていると思いますよ。ただ声を上げられないんですね。ネット社会というのは声を上げると炎上しちゃいますからね。今の時代はバード少将のような人が出づらいい時代だと思います。しかし声を上げている人もいるのは事実ですから、官僚の人たちにはもっと自信を持ってやったら良いと思いますよ。

▶**神田** 最後に、『零戦と戦艦大和』等における、日本の標準化・大量生産でできず、無謬性神話のた

め、冗長系が欠如するという指摘は、今も該当するところがある一方、昔と逆に、高付加価値個別生産に弱いことが弱点になっています。他方、『撤退戦の研究』で紹介された、軍艦のジャイロコンパスや機関銃、飛行機のエンジンまで重要な部品のパテントは全部欧米でありながら、海外の最先端技術のすりあわせで強い兵器を作れた伝統は、今や、逆にアップル等、シリコンバレーが得意になっています。先生はずっと日本の経済社会も見てこられましたか、生かすべき強みは何だとお考えでしょうか。

▶**半藤** どうも経済はよく判りませんので明確にお答えできませんが、日本人は総合力を発揮するときは本当にそれを発揮すると思います。ただどうしてそれを発揮するかというのが良く判ってない駄目なんですよ。これは戦艦大和を作る時でも、当時はみんな強力無比のアメリカと本当に対等に戦うためにはこれしかないんだということを徹底していたと思います。

よく政治の世界でも説明不足だとか言っていますが、説明不足というのではなくて、何のためにその政策をやるのかというのを国民に徹底しないと国民は総合力を発揮できません。日本人が昔良いものを作ったりしたのは、それをすることにどういう意味があるかをみんな判っていたからなのです。日本人は一緒になってやることに対しては非常に優れた能力を持っていますから。政治家が悪いのかマスコミが悪いのか判りませんが、総合力を発揮するために必要な意思統一の説得をするという作業が強く求められていると思います。

▶**神田** 本日は、大変に幅広い内容について示唆に富むお話を伺わせて頂き、誠に有難うございました。

(本対談は平成28年1月14日に収録された。)

本シリーズバックナンバー

23年	4月号	濱田純一	東京大学総長（国立大学協会会長）
		野依良治	理化学研究所理事長（ノーベル化学賞）
	5月号	清家篤	慶應義塾塾長（日本私立大学連盟会長）
		山中伸哉	京都大学教授（京都大学iPS細胞研究所長、後にノーベル生理学・医学賞）
	6月号	藤原和博	東京学芸大学客員教授（大阪府知事特別顧問）
	7月号	宮田亮平	東京藝術大学学長（金工作家）
	8月号	白石隆	政策研究大学院大学学長（総合科学技術会議議員）
		中村紘子	ピアニスト
	9月号	福田富昭	日本オリンピック委員会副会長（日本レスリング協会会長）
		刈谷剛彦	オックスフォード大学教授
	10月号	三村明夫	新日本製鐵会長（中央教育審議会会長、前日本経団連副会長）
		小林誠	日本学術振興会学術システム研究センター所長（ノーベル物理学賞）
	11月号	三遊亭円楽	落語家
24年	5月号	鎌田薫	早稲田大学総長（法科大学院協会理事長）
	6月号	葛西敬之	JR東海代表取締役会長（後に旭日大綬章）
	7月号	陰山英男	大阪府教育委員会委員長（立命館大学教授）
	8月号	毛利衛	日本科学未来館館長（宇宙飛行士）
	9月号	大沼淳	文化学園理事長（日本私立大学協会会長）
	10月号	松本紘	京都大学総長（後に国立大学協会会長、理化学研究所理事長）
	11月号	山下泰裕	東海大学副学長（オリンピック金メダリスト）
25年	6月号	秋元康	作詞家（AKB48総合プロデューサー）
	7月号	山岸憲司	日本弁護士連合会会長
	8月号	里見進	東北大学総長（後に国立大学協会会長）
	9月号	岡素之	住友商事相談役（規制改革会議議長）
	10月号	田村哲夫	渋谷教育学園理事長（日本ユネスコ国内委員会会長）
	11月号	潮木守一	名古屋大学名誉教授（元日本教育社会学会会長）
	12月号	松本幸四郎	歌舞伎俳優（文化功労者）
26年	1月号	緒方貞子	元国連難民高等弁務官（前国際協力機構理事長、文化勲章）
	3月号	濱口道成	名古屋大学総長（国立大学協会副会長）
	4月号	茂木七左衛門	日本芸術文化振興会理事長（元キックコマン副会長）
	5月号	飯吉厚夫	中部大学理事長兼総長（核融合科学研究所初代所長）
	6月号	坂根正弘	コマツ相談役（元日本経済団体連合会副会長）
	7月号	谷口功	熊本大学学長（国立大学協会副会長）
	8月号	佐藤勝彦	自然科学研究機構機構長（東京大学名誉教授、後に文化功労者）
	9月号	村井純	慶應義塾大学環境情報学部部長・教授（「インターネットの殿堂」入り）
	10月号	長谷川閑史	武田薬品工業会長（経済同友会代表幹事）
	11月号	利根川進	理化学研究所 脳科学総合研究センター長（ノーベル生理学・医学賞）
	12月号	弘兼憲史	漫画家
27年	1月号	川村隆	日立製作所相談役（前日本経済団体連合会副会長）
	2月号	黒田壽二	金沢工業大学総長（日本私立大学協会副会長）
	3月号	牧阿佐美	新国立劇場バレエ研修所長（元新国立劇場舞踊芸術監督、文化功労者）
	4月号	荒木光弥	国際協力ジャーナル社会長・主筆
	10月号	五神真	東京大学 総長
	11月号	谷村新司	音楽家（東京音楽大学客員教授/ 上海音楽学院名誉教授）
	12月号	小林喜光	三菱ケミカルホールディングス 取締役会長（経済同友会 代表幹事）
28年	1月号	天野郁夫	東京大学名誉教授（元東京大学教育学部長）
	2月号	奥正之	三井住友フィナンシャルグループ取締役会長（元全国銀行協会会長）